

■研究ノート

飯田市における文化行政 とまちづくりの変遷

—人形劇フェスタを中心に—

松崎行代*

飯田市は、1979年に始まった人形劇の祭典「人形劇カーニバル飯田」の成功を機に、1980年代後半より「人形劇のまち」として、人形劇をまちづくりの核とした文化政策を展開してきた。カーニバルは、当初、行政主導で誕生し運営されていたが、市内全地区に広がる「分散公演」を公民館が担うという飯田独特のシステムにより、徐々に市民への浸透を広げると共にその規模を拡大させ、飯田市民にとっても、国内外の人形劇関係者にとっても、なくてはならない祭典となっていた。そして、カーニバルは一旦20回で終了し、翌年、市民による実行委員会体制によって運営される「いいだ人形劇フェスタ」として再生され現在に至る。

本稿では、行政主導で誕生し運営されていたカーニバルが、市民の主体性が発揮される文化活動となり、人形劇によるまちづくりが実現されるに至った30余年の変遷を、行政の側面から分析した。その結果行政主導によってカーニバルが誕生した「揺籃期」、市民の文化運動としてカーニバルが浸透した「発展期」、まちづくりの核にカーニバルを位置づけた「成熟期」、市民がつくるフェスタへ移行した「新生期」の4期に分類できた。

この4期を追う中で、飯田市が文化行政の展開にあたり、行政は市民との協働的な関係のなかで手探りをしながら市民とのかかわり方を模索し、人形劇によるまちづくりを進めてきた文化行政変遷の過程が明らかになった。

* 京都女子大学大学院 現代社会研究科
公共圏創生専攻 博士後期課程

キーワード：人形劇、まちづくり、文化活動、
市民と行政

1 はじめに

長野県飯田市は、1979（昭和54）年に誕生した人形劇の祭典「人形劇カーニバル飯田（以下、カーニバルと省略）」の規模の拡大と市民への浸透を機に、10回を過ぎた頃より、「人形劇のまち」として人形劇をまちづくりの軸に位置づけた。1998（平成10）年、20回をもって一旦終了したカーニバルは、翌年「いいだ人形劇フェスタ（以下、フェスタと省略）」として再生し、現在2011年8月の開催をもって13回を数えた。カーニバルとフェスタをあわせた人形劇の祭典の歴史は33年におよび、飯田市民にとっても国内外の人形劇関係者にとっても、飯田市は「人形劇のまち」と認識されている。

カーニバルは、人形劇関係者（職業専門人形劇団（プロ劇団）およびアマチュア劇団関係者を指し、飯田では“人形劇人”または“劇人”と称す。以下、劇人と記す）が、交流と研鑽を目的に、自分たちのお祭りを飯田の地で開催したいと市に申請したことをきっかけに誕生した。1970年代当時、「地方・文化・まちづくり」が、国政においても地方行政においてもキーワードとなり始めていた。申請を受けた飯田市は、人形劇の祭典がまちづくりの施策になるのではと考え、劇人とともにその具体化に着手したのである。

劇人側は、これまでにない新しい形の祭典

誕生を考え、当時各所で使用されていた「フェスティバル」を避け「カーニバル」を名称に選定することからはじまり、市内広域にわたる開催により地域住民との交流を楽しむ「分散公演」、演じる劇人も観る市民と同じように参加費を負担しみんなでお祭りをつくる「ワッペン方式」、劇人自身が研鑽と交流を目的とし無報酬で飯田に集まる「手弁当方式」など、飯田ならではの新たな取組みを提案した。

こうした意欲的な「劇人」とそれを受け入れる「行政」と「市民」の三位一体によってつくり上げるカーニバルは、市民への浸透とともに規模も拡大し、1988（昭和63）年の第10回には、4年に1度世界各地で開催される世界人形劇フェスティバル（世界ウニマ主催）を、東京・名古屋とともに開催するに至った。世界からの注目、そして、日本ユネスコ協会40周年記念表彰（1987年）、国土庁長官賞（1988年）他の外部評価を得る中で、カーニバルは人形劇人のみならず、飯田市にとっても飯田市民にとってもなくてはならない夏の恒例行事となっていく。こうした経緯のなか、飯田市は、「人形劇カーニバルのまち」から、「人形劇のまち」へ、まちづくりの核に明確に人形劇を位置づけた文化政策を進めていくようになった。

しかしながら、人形劇のまちのシンボルともいえたカーニバルが1998年の第20回をもって突然の終了となる。市長の突然の終了宣言を受け、市民は20年の成果を検証するとともに将来を見つめ、1年に満たないなかで新た

な祭典「フェスタ」を誕生させた。「市民・劇人・行政」の三位一体でつくられていたカーニバルは、市民による実行委員会体制により、市民と劇人がやりたいことを実現させる市民の文化活動として再生した。

現在、2011年8月開催で13回を数えたフェスタは、4日間の開催において、参加劇団350団体、参加劇人約1,800人、市内上演会場約130会場で450ステージの上演があり、通算43,000人の入場者を数える。これをフェスタ実行委員80人が中心となり、本部ボランティアスタッフ400人、地区公演スタッフ2,000人が運営にあたり支えている。催事内容においても、上演・観客・運営に携わる人数においても、国内でこれほど大きな文化的活動は少ない。

このように飯田市の人形劇の祭典30年の歴史において、誕生当初、劇人と行政が主体となって取り組んでいた祭典が、市民への浸透・拡充とともに飯田市のまちづくりの核となり、市民が主体的に参加し祭典をつくりあげるまでに変遷を遂げた。この変遷こそが、飯田市の文化行政の取組みの足跡であり、文化によるまちづくり・ひとづくりの成果と言えるのではないか。

飯田市において人形劇の祭典を核とした文化政策によるまちづくりが成功に至った要因として、次の3点が考えられる。

1点目は、行政のかかわりである。飯田市は行政の立場として、人形劇を政策の中に取り入れ、人形劇の祭典によるまちづくりを行おうと、まずは行政主導のかたちで文化政策

に着手した。2点目は、合併自治体である飯田市が、合併後も旧町村の自治単位に設置した公民館とそこに配置された主事存在である。公民館は、住民による学習を組織し、住民による学習活動の実践だけでなく、住民による地域づくり実践の展開を保障し極めて高い地域自治のありかたを実現してきた（東京大学大学院教育研究科社会教育学・生涯学習論研究室飯田社会教育調査チーム、2011：5）。カーニバルは、飯田特有の「分散公演」の方式を取り、各地区での人形劇公演を大きな特徴としたが、各地区住民がカーニバルを自分たちの祭りとして受け入れ、回を重ねるなかでその形をつくり上げていったのは、公民館と主事存在がなくてはならないものであったと考えられる。3点目は、この地域の持つ文化的風土である。この地域には、今田人形や黒田人形に代表される人形浄瑠璃芝居や各地区の獅子舞、また本町3丁目の大名行列など、他地域から入り込んださまざまな芸能を積極的に受けとめ、それを住民が観るだけでなく演じて楽しみ、自分たちの文化として根付かせる、そんな文化的風土があった。これについては、「市民による文化活動成立の文化的要因—飯田市の人形劇フェスタを事例に—」（松崎、2011）としてまとめている。

1点目にあげたように、行政側から市民に下ろされたかたちで人形劇の祭典は始まったが、飯田市にはそれを受け止める、2点目にあげた公民館や主事存在、3点目にあげた文化的風土という素地が既にこの地にあったからこそ、この文化政策は成功に至ったと考

えられる。つまり、この3点から30余年の歴史を分析することで、飯田市における人形劇の祭典を中心とするまちづくりを総合的に分析することが可能になると考える。

そこで本稿では、1点目の、そもそもの文化行政のスタートとなった行政のかかわりを分析する。

2 揺籃期—行政主導によるカーニバルの誕生—

2.1 松澤太郎市長の政治理念の実現

人形劇カーニバル飯田は、1979（昭和54）年8月、長野県南部の伊那谷に位置する飯田市に誕生した。当時人口8万の地方都市に、日本各地からプロおよびアマチュア人形劇団60団体、381人の人形劇人が参集し、市民ほか一般参加者3,769人の参加を得て、2日間にわたり市内17会場で44作品の上演を行った人形劇の祭典は、当時他に類を見ない画期的なものであった。

この祭典誕生の契機は、前年1978（昭和53）年に、宇野小四郎氏（財現代人形劇センター理事長）と故須田輪太郎氏（当時、人形劇団ひとみ座座長）による当時の市長松澤太郎氏への、年1回の人形劇関係者の全国的な集いを飯田市で開催したいとの要請であった。松澤市長は、人形劇や人形劇界に関する知識や情報を持たなかったものの、「なぜか強く心を動かされ心の中ひそかに期するところがあった」（松澤、1992：10）。それは、オイルショック後の経済不況のなか1977（昭和52）年に策定された全国総合開発計画による「地

方の時代」の提唱および過疎化・高齢化が進展する地方都市の地域活性化という市に突きつけられた課題と、松澤市長の政治理念である各地方自治体独自の地方行政の確立、この2点が直感させたといえる。

松澤太郎氏は、1956（昭和31）年に43歳で飯田市教育長（図書館長兼務）、1964（昭和39）年総務部長、その後1968（昭和43）年に市長選に出馬するも落選し、次期1972（昭和47）年10月に再出馬して当選し市長就任を果たした。松澤氏は7年半の教育長時代より、公民館活動を重視し社会教育の充実に取り組んだ。それは市長になってからも一貫して変わらない氏の政治理念によるものであった。飯田市歴史研究所がまとめた「オーラルヒストリー 松澤太郎さんに聞く」（2002年10～11月）にかけ4回の聞き取りを実施）（増田、2003：176-177）で、松澤氏は次のように語っている。

僕は市長になってからも公民館、社会教育、あるいは文化行政を重視する姿勢をとってきたつもりなんだ。（中略）今でいう地方分権とか「地方の時代」というものを、教育長の頃から、もっと地方は地方なりの、あるいは地方独自の行政をやらにゃいかん、そうすべきだと。そうするには公民館とか社会教育を盛んにして、もっと市民が行政とか政治を勉強しなきゃいかんと。市民の意識を高めにゃ、いくら行政が号令をかけたって上意下達。（中略）同じ目線で同じレベルに立つんだ、市民と市役所は。そして、松澤市長就任2期目の1978（昭和

53) 年に、市民40名を参加させてまとめた第2次飯田市基本構想の基本理念（飯田市、1978：2）にも、

本市のまちづくりは、地方自治の精神である市民による市民のための市政の推進を基本とし、人間尊重を基調とした“緑と光にあふれた豊かなすみよい田園都市”を理想とする。

とあり、松澤市長は、市民が主体的に参加し行政とともに作り出す地方自治を理念として市政に臨んでいた。

また、飯田市は1937（昭和12）年以降数回にわたる合併により拡大し、カーニバル誕生時の1978年には、旧市町村である16の地区で組織されていた。各地区には公民館と支所が設置され、地区ごとの社会教育活動の活性化や地区の強固なまとまりは形成されていたものの、一方では地区を超えた全市的な一体感を形成するには至っていなかった。松澤市長は、こうした飯田市の特徴と課題を、宇野・須田両氏からの提案を聞くやいなや、人形劇の祭典を「地域づくりの文化イベント」にしようと考えたのである。松澤氏は、前掲「オーラルヒストリー—松澤太郎さんに聞く」（増田、2003：179）の中で、宇野・須田両氏から要請を受けたときの想いを語っている。

たとえばどこかで盆踊りをやるから補助金がほしいとか、どこかで夏祭りをするから補助金がほしい、そういうことを言うてくるんだけど、小さな部落の単位でやるだけで、それがいっこうにつながりをもってらん。あのころはイベントなんて

いう言葉は知らなんだけど、市全体が市民全体が一つのものに向って収斂をしてやっていくものがないかな。（中略）1期半ばかり市長をやってみて、いろいろなことをやってみて、なにか全市でやれることはないかなと考えておったときなんで、これはおもしろいかもしれない。

また、

地方自治の主旨に基づいた地域の真の活性化を実現するための方策、つまり地域住民が健康で文化的な人間居住の総合的環境を整備する、そのための共通目標の確立に人形劇が活かせるのではないか。人形劇を媒体として、市民が挙って参加し、共に楽しみながら互いに連帯を深め、共通の目標に向って行動しうる何かが生まれまいだらうか、今にして思えば『地域づくりのための文化的イベント』を想定した（松澤、1992）。

とも述べ、松澤市長のなかでは、自身の政治理念を念頭に、最初から、人形劇の祭典を飯田市の文化行政に位置づけ、まちづくりの手段として活用することがねらわれていた。

市では社会教育課が中心となり、子ども劇場・飯田文化協会等の地元の関係団体を巻き込み、人形劇関係者らと話し合いを重ねた。その中で、「今まで全国で行われている人形劇のフェスティバルにはないようなことができたらい。たとえば出前公演のような発想で、面の広がりを持った開催ができれば面白い」という劇人側の意向と、「それならば市民みんなに還元できるお祭りになる」という

飯田市側の意向が重なり、「多くの会場で、多くの公演をして、飯田を人形劇でいっぱいにする」という今までにない特色ある人形劇のお祭りの構想が固まった。特定の劇場や公民館だけでなく、市内全域に多くの会場を用意し、多くの市民が観劇できるようにする。しかも、会場の運営を各地区住民が担うという「分散公演」は、飯田方式として注目を集めた。また、上演する劇人も観客である市民も、企画運営する関係者（行政や市民や劇人実行委員会）も、すべての人がお祭りをつくり上げる参加者として平等に参加費を負担する「ワッペン方式」は、このお祭りが単なる一過性のイベントではない息の長い文化活動として飯田に根付くことを願った思いの具現化であった。

2.2 「子ども」・「公民館」を手段にした市民への浸透

こうして、生まれた新しい祭典の運営にあたっては、分散公演の会場は地元の市民が用意し、全体の受け入れは行政が行い、人形劇人は作品を持ってあるいは観劇参加者として飯田にやってくるという形で始まった。分散公演により、ある地区に集結しない全市的な広がりをつながりをもった祭典、そして、分散公演の運営に市民もかかわり祭典のつくり手として主体的に参加することにより、松澤市長のめざすまちづくりがこのカーニバルのなかで具現化されることとなった。

この大規模な催しがより多くの市民に受け入れられるために考えられたのが、ユネスコ

がちょうど1978年に設定していた「国際児童年」と結びつけることで、市民にこの祭典開催の意義を納得させることであった。実際に受け入れをする地区実行委員や世話役の人たちは、形の見えにくい初めてのことに、当初かなりの混乱もあったようだが、とにかく「子どもたちの楽しむことを」との思いで準備が進められ、1回目の開催が成功した（人形劇カーニバル飯田実行委員会，1990：24）。以後、祭典誕生の経緯を語る際、「国際児童年に誕生した」と述べられたことが多かったが、「国際児童年」は、飯田市が、公民館を中心とした市民の協力を求めるための手段として合理的に活用したといえる。カーニバル開催を5ヶ月後に控えた1979（昭和54）年3月15日の市議会で、松澤市長は、「特別に今年が国際児童年だからということで、現在その記念事業というようなものをいたす考えは持っておりません」（飯田市議会事務局，1979：55-61）と答弁している。つまり、カーニバルを誕生させ根付かせる契機として国際児童年を利用しながらも、あくまでもまちづくりを真の理念においてカーニバルに取り組もうとしていたことがうかがえる。

3 発展期—市民の文化運動としてのカーニバルへ—

3.1 公民館の社会教育によるまちづくり

カーニバルは4回目以降形が整い、参加劇団数・上演会場数・ワッペン売上げ数を増加させ年々規模を拡大していった（人形劇カーニバル飯田実行委員会，1990：261）。それに

伴い、運営面において実行委員会事務局を担当していた社会教育課だけで仕事をこなすことが難しくなった。特に地区の実行委員会の要求や要望に対応しきれないところも出はじめ、1985（昭和60）年の第7回より運営体制を一新し、実行委員長に市長、そして、事務局を社会教育課から飯田市公民館に移動した。事務局が教育行政を担当する社会教育課から教育機関である公民館に移ったことで、カーニバルが公民館を主体とした社会教育によるまちづくりを目指すものであることが、行政のなかで位置づけられた。開催期間中の実行委員長挨拶にも変化が表れ、それまで慣例的に取り上げられていた「児童の健全育成のため」という言葉は消え、代わりに「まちづくり」「地元住民と一体となって」という言葉と、真に全国的なカーニバルにしたいという思いがはっきりと出てくるようになった（人形劇カーニバル飯田実行委員会、1990：60）。つまり、今までは前面に出してこなかった、カーニバルはまちづくりのための文化活動であるという飯田市の文化政策の姿勢を明らかにした。これは、1987年第9回の開催要項にまとめられた「人形劇カーニバルの基本的な考え」にて明文化された（人形劇カーニバル実行委員会、1990：288）。

以下6項がカーニバルの基本理念である。

- ・カーニバルは、市民と劇人と行政が一体となってつくりあげる文化運動であり、文化創造の喜びがその原動力である。
- ・カーニバルは、地域平面（地域全体に広がりを持つ）の趣旨に基づき、分散公演

を基本的な柱とする。

- ・カーニバルは、自由・平等の主旨に基づき、すべての劇人が手弁当により参加すること及び全ての観劇者が統一価格のワッペンにより観劇することを原則とする。
- ・カーニバルは、現代芸術と伝統芸術を調和させ、新しい芸術を創造していく場である。
- ・カーニバルは、劇人相互および市民相互の研修と交流の場であるとともに、劇人と市民のふれあいの場である。
- ・カーニバルは、地域の文化発展のみならず、まちづくり、地元の企業の活性化、観光資源の開発、国際化等を含めた地域の総合的發展をめざしている。

第1項にカーニバルを「市民と劇人と行政が一体となってつくりあげる文化運動」と性格付け、それはまた第3項の自由・平等の主旨に基づき、劇人は手弁当で参加し、全観客が統一価格のワッペンにより観劇することを原則としたことにより、一層参加者が主体的に活動にとりくむ「文化運動」としての位置づけが明確に示された。また、最後の第6項には「まちづくり、地元企業の活性化、観光資源の開発、国際化等を含めた地域の総合的發展」と、地域おこしのものを期待している。

3.2 国際展開への積極的な働きかけ

第3回カーニバルにアメリカとハンガリーから初の海外劇団が参加したのを契機に、第

7回にはハンガリーと台湾から、そして第8回には、「第2回ウニマアジア会議」（主催：ウニマアジア委員会・日本ウニマ）が併催され、アジアを中心に12カ国の人形劇関係者が参加した。各国の人形劇の現状と問題点が協議された会議のほか、各国劇団の上演が多数行われ、飯田の街は国際色豊かに賑わった。市民は、観劇を通して海外の人形劇文化に触れ、また、ホームステイの受け入れや通訳ボランティアにより海外の劇人との直接的な国際交流を体験した（飯田市、1986：4-5）。

これに続き、ウニマ（国際人形劇連盟）が4年に1度開催している「ウニマ世界大会・世界人形劇フェスティバル」を、1988（昭和63）年のカーニバル10回に併せた飯田への招致活動に取り組み、決定を得た。

松澤市長は、カーニバルが回を重ねるなかで徐々に市民に浸透し、市民挙げてのカーニバルになったと評価したうえで、

今後は、この国際的な大行事を如何に立派に成功させるかについて全市を挙げて取り組むこととなりますが、このことがこの地方の文化や芸術の振興に役立つだけでなく、青少年の眼を世界にむかって大きく開かせ、国際化時代にふさわしい有為な人材が育成せられ、この地方の活性化のために大きく役立つことを期待するものです。

と、『広報いいだ』（飯田市、1986：9）で述べている。

また、1988（昭和63）年6月14日の市議会にて、間近に迫った第10回カーニバル・世界人形劇フェスティバル開催に際し、

こういうことを通じて市民が外国の人たちと接触をしたり、そしてその友好を深めることによって、自負心というような言葉をお使いになりましたが、やはり今までは山の中の小さな閉塞的な都市、地域でありました飯田の市民が大きく世界に目を開くことができるというようなことになることを期待しておるわけでございます。（中略）これをきっかけにして国際交流をすると、なんとか市民が自信を持って国際的な場に出て行けるような、あるいは国際感覚が身につけられるようなということを期待しておる（飯田市議会事務局、1988：158）。

と、地域で成熟してきた活動を広く海外にまで発信することで、人や文化のより多様な交流を生み出し、地域住民の「国際感覚」の育ちとともに市民が自信を持つという言葉に表われるように、飯田市へのアイデンティティ形成がねらわれることを述べている。

世界人形劇フェスティバルは、9日間という通常の倍以上の期間を設定し、海外からの参加31劇団403人、国内劇団とあわせると330劇団2,234人、107会場での上演が実施された。この時も、海外から来た人形劇人と飯田市民との交流はさまざまな場面に生まれ、田舎ならではのあたたかいもてなしを受けた海外からの劇人は、その後「IIDA」の名を広く世界に広げることとなった（人形劇カーニバル飯田実行委員会、1990：138-141）。

当時日本ウニマ会長の川尻泰司氏は、

（カーニバルが）地域に開いた窓という観点でいうなら、とにかく全てが中央集中、

大都市中心に行われがちなのが国の状況下で、地方的地域社会に人形劇という年齢的差別を超えて、子どもから大人までを含めて働きかける文化的活動を通して、地域社会の文化的活性化をもたらし、さらにその国際的展開によってその地方的地域性に大きな刺激をもたらし、生活、文化、行政にその国際的ひろがりを見ちびき入れるという役割を果たしたと、いってよいように私は思う（人形劇カーニバル飯田実行委員会、1990：126-141）。

と述べ、カーニバルの10年間を評価した。

松澤市長が進めた国際化は、内部の充実と外部への飯田の存在感のアピールとの循環を生み出し、当初ねらっていた飯田市民の自信とわがまちへのアイデンティティーを育んだ。

4 成熟期—「まちづくり」の核としてのカーニバル—

4.1 まちづくり政策への位置づけ

世界人形劇フェスティバルを併催した第10回カーニバルが大成功に終わり、市民や劇人の間には「人形劇のまち」がキーワードとなり、「人形劇のまちづくり」への機運が一気に高まったと、当時を知る元飯田文化会館館長飯島剛氏は述べている（いいだ人形劇フェスタ実行委員会、2009：64-69）。

こうしたなか、11回目以降をどうしていくかが、飯田市にとって大きな課題となった。市は文化庁の協力を得て、第11・12回に「地域づくり文化フォーラム」を開催し、カーニバルを文化による地域づくりの先進的事例と

して全国へ発信するとともに、国内の実践に学ぶパネルディスカッションを開催し、参加者相互が文化によるまちづくりについて考え合う場を設けた。

また、庁内においては、1992（平成4）年に「人形劇のまち研究プロジェクト」を設立し、人形劇のまちづくりのための検討が重ねられた。翌年まとめられた報告書には、人形劇のまちと言われるようになった経緯、人形劇のまちが求めるものと、その実現にむけた具体的事業展開がまとめられた。

- ・カーニバルは13回の歴史のなかで子どものための文化事業としてだけでなく、地域文化を育てる可能性をもった事業であるというように見方が変化し、地域文化やコミュニティへの波及効果が大きく、単なるイベントではない文化運動としての継続性を有している。
- ・「人形劇のまち」の求めるまちづくりの理念は、「いろいろな人が訪れ楽しい交流のある開かれたまちをつくりたい」というものである。このまちづくりを進めることは、少なくとも地域の個性を明確にし、多様な文化を育ててきたこの地域の特徴を現代に再生し人形劇を通して世界や国内とのいろいろな交流を可能にして、この地域で生活することが楽しいという雰囲気創造してゆくことである。
- ・具体的な事業や事業展開については、人形劇のまちの理念にあっていれば、カーニバルをさらに振興するだけでなく、いろいろな事業展開が望まれ、その際は、

市民が主体になるもの、劇人が主体となるもの、行政が主体となるものというように分かれるが、それぞれがはっきりした目的意識をもって事業を展開していくことが大切であるとしている。

その後の飯田市の人形劇のまちづくりは、このプロジェクトの報告書をもとに、カーニバルの開催、人形劇の地域への普及、人形劇関連施設等の充実、人形劇を介した国内外との交流といった施策により組み立てられ、展開されることになった。そして、それらは、1994（平成6）年に飯田文化会館に設置された「人形劇のまちづくり係」が担うこととなった。

こうした経緯を踏まえ、1996（平成8）年にまとめられた第4次基本構想では、「人も自然も美しく輝くまち飯田—環境文化都市—」を目指す都市像とし、「人形劇のまちづくり」を明確に位置づけた。「子どもは美しく豊かなところと夢を育み、大人たちは誇りを感じて交流を楽しんでいる『人形劇のまち』を飯田市の個性として磨き、小さな世界都市をめざします」として重点プログラムの一つに置き、また、「個性的で魅力的な地域文化を育むとともに、人形劇の振興に貢献できるように、今まで以上に市民・劇人・行政が一体となって、人形劇をいかしたひとづくりを進めていきます」として、ひとづくりの柱に位置づけた（飯田市、1996：59）。

4.2 文化活動の拠点づくり

カーニバル10周年を記念し、文化会館に併

設させて飯田人形劇場が開設された。これにあわせ、文化会館と人形劇場を市の文化活動の拠点とすべく、これまでの貸し館業務に事業企画業務を含め文化会館の機能を拡充させた。この画期的な変革により、行政のハードとソフトの両面からの文化政策への取り組みが始まった。

そして、第11回カーニバルからは、実行委員会事務局を飯田市民館から飯田文化会館へ移動させた。これまで各地区の公民館主事は、カーニバルの本部業務へのかかわりが大きく、本来の業務である各地区の公演に十分かかわれない状況が生じていた。しかし、この体制により主事は地区住民の文化活動支援に専念できるようになり、地区公演を通した「ひとづくり」のための活動の充実がねらわれた。当時伊賀良公民館の主事であった木下巨一氏によると¹⁾、この頃より公民館委員以外の有志の地区実行委員による活動が始まり、市民の主体的な参加が広がりを見せた。

こうして、市内全域に広がる地区実行委員会を中心とした地区公演は公民館が担い、規模の拡大したカーニバル全体の総括および本部の公演や催事は文化会館が担うこととなった。これはカーニバル全体における地区のあり方や位置づけに少なからず影響を与えた。つまり、全国からの劇人・観客の集客をねらう活動や人形劇の芸術的向上・劇人の交流研鑽に直接関わる公演や催事を担う「本部」と、広く飯田市民に人形劇を普及し合わせて地域のひとづくりをねらった社会教育を担う「地区」が、この頃より次第にそれぞれの役割を

明確にし、組織が機能分化していったととらえられる。

人形劇場を皮切りに、人形劇のまちの活動拠点・シンボルの建設は、カーニバル10回終了後に交替となった田中秀典市長時代に顕著になる。1994（平成6）年に今田人形座の活動拠点として今田人形の館、1998（平成10）年に飯田市に接する豊丘村出身の竹田扇之助氏が座長を務める竹田人形座の人形および資料を保管展示する「竹田扇之助記念国際糸操り人形館」、そして、1999（平成11）年には、黒田人形座の活動拠点として「黒田人形浄瑠璃伝承館」が開設された。こうした建物によるハード面の充実を図ることで、カーニバル開催期間のみでなく、そこでの人形劇の公演や日常的な稽古活動の展開が可能になり、日常的にまちのなかに人形劇の雰囲気醸し出される「人形劇のまち」らしさをつくり出そうとした。

4.3 「行政は黒子」という基本理念

田中市長は、1993（平成5）年12月10日の市議会において、文化活動の推進について、

地域における文化活動は、地域の連帯を育み、日常の市民生活に潤いをもたらすものでなければなりません。そのために活動の主体は市民であり、行政が文化活動を施行するようなあり方は、部分的、過渡的にはあり得ても、本来の姿ではなく、生涯教育という時代を迎え、行政は、これら市民の活動を情報や施設、財政面でサポートできる体制づくりを主体とします。言いかえ

ますと、ともに行動しつつも行政は本来黒子の立場にあるべきと考えております（飯田市議会事務局、1993：159）。

と、文化活動にかかわる行政の立場、つまり、市民参加の文化によるまちづくりへの行政の関わり方を述べている。この「行政は黒子、カーニバルは市民のもの」という考えは、市長就任当初から変わらず持っていたようである。カーニバル10周年記念誌の座談会でも、これからの望ましいカーニバルについて、

どうやって市民のものにしていくかなということですね。先ほどの話の中にございました公民館活動が盛んだから今日まできたってというのは、これはもう間違いのないところですけども、ウインドーの展示にしましても、やっと市民のみなさんがかなり理解を示してきてくれた。これを今後は市民のもとに戻さなくてはいけないということです。環境整備はいろいろ作って利用して市民のものに根付かせていくかということですよ（人形劇カーニバル飯田、1990：223-224）。

と述べている。

カーニバルが市民に浸透し、飯田市の夏の行事として定着した11回目以降、市民会議、青年会議所、子ども劇場、商店街の人びとなど、団体を中心としてではあるが、祭りのつくり手として主体的にカーニバルにかかわる市民が増加した²⁾。田中市長が願っていたように、カーニバルは市民のものになっていったといえる。

第20回の節目の年を視野に入れ、田中市長は1994（平成6）年9月6日の市議会にて市民にとってのカーニバルの価値を次のように述べている。

第20回の人形劇カーニバルにかかわります最大の課題は、その時、名実ともにカーニバルのまちを超えて、いかに人形劇のまちへ近づいているか、それは小さな世界都市への姿へ脱皮しつつある状況にありたいということです。先にも申したとおり、21世紀は心の時代、生きがいの時代、文化の時代として色濃くなるものと思われまます。一地方都市でありましても、世界に光を放つ珠玉のようなまちにしよう、それを市民が意識し、愛するものを持っていることが、これからの国際社会の中で生きる手だてとなるものだと思います（飯田市議会事務局、1994：259）。

ところが、第20回のカーニバル開催を直前に控えた1998（平成10）年7月、市長より突然のカーニバル終了宣言が出され、カーニバルは一旦幕が閉じられることになった。カーニバルが終了に至った経過について、田中市長は同年9月7日の市議会において次のように答弁している（飯田市議会、<http://www.kaigiroku.net/kensaku/iida/iida.html>）。

事態の引き金となったのは、カーニバルの事前打合せにおける行政側事務レベルの不用意な発言でありましたが、それに至るまでも長い間の様々な課題や意志の疎通を欠いた事例の積み重ねがあり、それらがその発言によって一気に吹き出したと考え

られます。その発言とは、劇人と市民と行政の三者が共同し等しく主催者の立場を担う三位一体の関係の中で役割分担を担い成長してきたにもかかわらず、「劇人委員を市で委託したい」との提案でした。

そして、一部市民には、来るべきときが来たと予想された当然の事態であったという一議員の見方も受けながら、劇人・市民・行政の三位一体について、さらに考えを述べている。

ことによると三位一体の意味を単に三つのものが一つに融合するというように理解をしている向きが多いが、劇人・市民・行政の関係性のなかに、少なくとも二つの重要な意味合いがあると考えています。一つは、三者がそれぞれ行動の理念や様式、そして価値観が異なるということであり、カーニバルにおいてはあえてこれの一つにしようとするのではなく、まず、お互いが基本的に異なるものであることを認識しながらその上で互いの特性を生かしながら共有できるものを見出し、ともに育んでいこうというものです。今回の事態は、お互いの違いをまず認め合うというこの原点が風化したために生じたことだともいえるのではないのでしょうか。もう一つは、三位とは固定的、絶対的なものではなく、流動的であり、総体的な関係だと思えます。このことこそ、20年間を検証し、新たな人形劇の祭典を考える上で舞台が飯田であることの必然性を説明する重要なポイントだと考えています。「文化とは農耕や土地、さらに

は自然や風土といった地域固有の環境の中で、人びとの多岐にわたる継続的な活動の集積として培われるその地域独特の息型の形式の総称である」そうした考え方に立つと、本来行政の主導によって形成されるといった類の形にはまったものではないと考えます。そうすると、あらたな三位一体の体制においても、**行政は基本的には黒子**（ゴチは筆者）としてかかわることになると考えられます。

つまり、文化活動における市民の主体性が発揮されたまちづくりの実現が願われた結果、行政は、一旦カーニバルを終わらせ、新たな祭典の誕生を市民に託すという最も強烈な方法をとったといえる。

1998年11月15日、第20回カーニバル終了後の実行委員会において、実行委員長である市長は、「私としては今回のことは、カーニバルが20年間積み重ねてきたものを否定するものではなく、成人を迎えたカーニバルがこれからの時代にふさわしくなっていくために、必要な選択であったと理解しております」（いいだ人形劇フェスタ実行委員会、2009：80）と述べている。

5 新时期—市民がつくるフェスタへ—

5.1 市民による再生と新たな課題

実行委員会の解散を受けて新しい祭典を起こすための動きが一気に進み始め、20回終了後の1998（平成10）年11月27日、準備会設立のための会合が開催される。参加団体は、新しい人形劇カーニバルを考える会、南信州ア

ルプスフォーラム人形劇カーニバルを考える会部会、飯田青年会議所、地元劇人有志、飯田市公民館、市役所プロジェクトチーム、教育委員会、教育長、教育次長、文化課長、人形劇のまちづくり係等と、市民団体と行政の関係者で構成された。引き続き11月30日に、新たな人形劇の祭典準備委員会設立会議が飯田市教育委員会文化課の呼びかけで正式に行われた。その中で確認されたことは、「市民主体による運営」「新たに基本理念を構築すること」の2点であった（いいだ人形劇フェスタ実行委員会、2008：82）。翌年1月初旬には、新たな人形劇の祭典準備委員会が開催されたが、3月末には準備委員会は解散し、4月にいいだ人形劇フェスタ準備委員会企画運営委員会が開かれ、新たな人形劇の祭典誕生がよいよ具体化した。

新しい人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」は、基本的な考え方を「市民と人形劇人がともにつくる祭典」とし、これまでの市民・劇人・行政の三位一体という結びつきでなく、市民・劇人誰もが自分の思ったこと、やりたいことが提案でき、その提案が皆の賛同を得られれば、皆でその提案が実行できるようにサポートをする。行政はあくまで裏方であり、情報の提供や企画運営を担うこととなった。行政の裏方としてのかかわりは、具体的には、市長および教育長が顧問、会計監査も行政側の人を含み行われる。そして、事業の全体を人形劇のまちづくり係が事務局として支える。行政は、フェスタがひとづくり、まちづくりを目標としていることを念頭に、

市民の発案や手法など、その質を吟味し、サポートやガイドや、時にはリードしながら進める立場としてかわることとなった。また、市からはカーニバル当時と同様補助金が予算化された。カーニバル20回の際は世界フェスティバルの特別予算がついたため比較できないが、その前年第19回の1,600万円と比較すると、フェスタ第1回は、それを400万円上回る2,000万円が予算化された（いいだ人形劇フェスタ実行委員会，2008：260-261）。

フェスタはその後順調に運営され、10回には世界人形劇フェスティバルを開催。また、韓国の春川人形劇祭、台湾の雲林国際人形劇フェスティバルと「東アジア三大人形劇フェスティバル友好提携」を締結し、フェスティバル同士の友好と今後の交流を確認しあった。

前述したように、国内最大の規模を保ち続け海外劇団からの関心も高いフェスタは、しかしながら、その活動継続において、実行委員の負担感増大、人形劇の専門領域関係者との連携や国内外の人形劇情報の収集および飯田からの情報発信の問題など、継続的な発展のための課題が生じ始めた（飯田市，2010）。

カーニバルでは、運営の三位一体の一つに人形劇人委員会が位置し、人形劇の専門家からの意見や実践による内容の充実が図られていた。しかし、フェスタとなり、カーニバル当時ほどの劇人の企画段階へのかかわりは望めなくなった。市民の活動をサポートする行政も、人形劇の専門的部分での援助は難しい。人形劇という芸術文化を核とした市民活動の展開において、その核となる人形劇そのもの

の部分の充実が図られることが、祭典の充実、ひいては参加する市民の充実感を生み出すと考えることができるが、その点での困難さが見られ始めた。

5.2 リニア開通を見据えた「人形劇のまち」づくり

人形劇を中心にいろいろな人が訪れ楽しい交流のある開かれたまち、フェスタ期間だけでなくいつでも人形劇が楽しめ人形劇の雰囲気にあふれるまちが目指されたものの、現状は十分な実現に至っていない。

2004（平成16）年、田中市長に替わり就任した牧野光朗市長は、リニア開通を見据えた「小さな世界都市」にむけた取組みにおいて人形劇に大きな可能性があることを認め、あらためて「人形劇のまち」の実現に向けた取組みを始める。2010（平成22）年には、「人形劇を通じた小さな世界都市の実現に向けた指針」（飯田市，2010）をまとめ、いつでも人形劇のある小さな世界都市が目指された。翌2011（平成23）年3月9日の市議会で、牧野市長は、

小さな世界都市、まさにリニアを見据えてこうしたグローバル化が進む中で、どうやってこの地域を位置づけるかというなかで、非常に私はキーワードになるというふうに思っております。リニアは、この地から世界に向って飛躍する。（中略）全国のみならず、世界のモデルになるような世界都市を目指していくということを、このリニア時代を見据えて私たちの地域が考えて

いく必要性があるということを考えると、人形劇のまちづくりといったことも、非常に世界に通用する要素だと思っております（飯田市議会、<http://www.kaigiroku.net/kensaku/iida/iida.html>）。

と、リニア駅誘致を強く意識し、「人形劇のまち」づくりを模索している。市では、同年6月、市民およびプロの人形劇関係者により組織された「人形劇のまちの将来を考える会」を設置し、リニア時代を見据えた飯田市の将来あるべき姿と、その実現に向けて人形劇に関わる多様な主体が協働できる仕組みづくりについての検討会を開催した。ここでの検討結果が2011年12月に、「人形劇のまちづくりを推進する新たな仕組みづくりに関する方針（中間報告）」としてまとめられ、パブリックコメントを集めている³⁾。

このなかで飯田市は「人形劇センター（仮称）」の設置を提案し、

「小さな世界都市」の実現に向けて、「人形劇のまち飯田」を大きく育てていきたいと考えます。そのためには、市民も劇人もわくわくできるような取組み、これまでは不十分であった専門的な支援、人形劇に関わる人の心の拠りどころとなるような活動など、外部からの刺激も積極的に受け入れながら、共に育ち合うことが大切です。人形劇センターでは、そうした人形劇のセンター的機能を担います（飯田市、2011）。

とし、具体的に、「国際化の推進、情報収集と発信」「人形劇の創造活動支援」「体系的な研究」の3つの機能をあげている。ここでは、

情報・創作活動（人形劇）・研究等の外部への発信が活発に展開されることがねらわれている。そして、この新たな仕組みによる効果として、市民は「人形劇に関する情報収集および専門的指導の教授、良質な人形劇公演の保障、海外との文化交流の活性化と国際理解の拡充」、行政は「小さな世界都市としての拠点性の高まり、人形劇を通じた大学連携の促進、青少年の情操教育への寄与、市民への多様な芸術活動の場の提供」が挙げられている。こうしたことの先にコミュニティ形成への意識がどの程度あるのか、疑問を感じるところでもある。

今後、寄せられたパブリックコメントを含めた更なる検討により修正が加えられ、「人形劇のまち」づくりへの具体的な取組みが展開されていく。

おわりに

市民の主体性を尊重する文化活動展開における行政のかかわり方は、つまり、ひとつづくり・まちづくりを進める施策と言い換えることができる。前述した田中秀典市長の言葉をあらためて挙げる。—「地域における文化活動は、地域の連帯を育み、日常の市民生活に潤いをもたらすもの。そのために活動の主体は市民であり、行政が文化活動を施行するようなあり方は、部分的、過渡的にはあり得ても、本来の姿ではない。行政は市民と共に行動しつつも本来は黒子の立場にあるべき。」（飯田市議会事務局、1993：159）—ここに述べられているように、市民の成熟度、そのま

ちの置かれた状況により、行政のかかわり方は変化する。行政と市民とでつくり上げていくその地域ならではの活動こそが、生活であり、文化であるとも考えられる。そういった意味で、飯田市の人形劇の祭典を核とした30年の変遷は、確かに文化政策によるまちづくりの30年だった。

人形劇の祭典をこの地に誕生させ、ある程度根付くまでの「揺籃期」においては、行政が主導する形で市内各地での人形劇公演を執り行い、まず、その形をつくり上げた。一定の形が形成され規模の拡大が進んだ「発展期」には、主事を中心とした行政は指導者的立場で市民を育てた。そして、市民が祭典に積極的なかわりをみせるようになる「成熟期」には、市は「人形劇のまち」を政策の柱に掲げ、人形劇によるまちづくり・ひとづくりに積極的に取り組んだ。そのなかで生じたカーニバル終了は、市民の真の自立のために行政が自ら負った“傷”だったとも言える。そして、フェスタとなった「新生期」、行政は裏方として市民の活動を支える協働的な関係を構築した。

「飯田市のカーニバル誕生から現在のフェスタまでの約30年間は、行政が文化運動にどうかかわるかを学んだ30年だった」と、元飯田文化会館館長 飯島剛氏は述べている(2010, いいだ人形劇フェスタ実行委員会: 64-69)。

この30年の取り組みのなかで、飯田市民はどれだけ主体的に市民の文化活動であるフェスタに取り組むようになったか、フェスタが市

民のお祭りとしてどれだけ浸透しているか、また、「人形劇のまち」が市民のアイデンティティ形成の核となっているか。まちづくり・ひとづくりの検証をする必要性が、今、リニア開通を見据えた「人形劇のまち」づくりが展望されるなか、喫緊の課題となっている。この課題への示唆を与えるべく、今後の研究を進めていきたい。

註

- 1) 2011年8月、飯田市公民館にて、現在飯田市公民館副館長の木下巨一氏にインタビューを実施した。
- 2) カーニバル11回より、飯田青年会議所が、人形劇人の送迎の協力をする「ふれあいキャブ」を開始。12回目には、11回目からかわるようになった青年会議所がカーニバルステーションの運営にかかわり中心的な役割を担う。また、有志市民の団体である市民会議は、商店街にパレードの景品を呼びかけ、コンテストを実施。婦人会と農協のプロジェクトにより野外交流会で焼肉退会を企画運営。以上のように、11回目以降、市民の各種団体による自主参加が増加した。
- 3) 2011年12月15日より2012年1月14日まで、飯田市は、広報・インターネットのホームページ等を活用し、「人形劇のまちづくりを推進する新たな仕組みづくりに関する方針(中間報告)」のパブリックコメントを募集した。

参考文献

- 飯田市, 1986, 「広報いいだ」464号
 ———, 1986, 「広報いいだ」466号
 飯田市議会事務局, 1979, 『飯田市議会会議録』昭和54年第1回定例会
 ———, 1988, 『飯田市議会議事録』

昭和63年第2回定例会

飯田市議会事務局, 1993, 『飯田市議会議事録』

平成5年第4回定例会

飯田人形劇フェスタ実行委員会, 2010, 『つながってく。～人形たちとあゆんだ30年～いいだ人形劇フェスタ10周年記念誌』 いいだ人形劇フェスタ実行委員会

東京大学大学院教育研究科社会教育学・生涯学習論研究室飯田社会教育調査チーム, 2011, 「開かれた自立性の構築と公民館の役割―飯田市を事例として―」『学習基盤社会研究・調査モノグラフ』第2集

人形劇カーニバル飯田実行委員会, 1990, 『人形劇カーニバル飯田10周年記念誌 人形たちがやってくる―カーニバル10年のあゆみ―』人形劇カーニバル実行委員会

増田郁夫, 2003, 「オーラルヒストリー 松澤太郎さんに聞く」『飯田市歴史研究所年報』1号, 176-177.

松崎行代, 2011, 「市民による文化活動成立の文化的要因―飯田市の人形劇フェスタを事例に―」『現代社会研究科論集』第4号

松澤太郎, 1992, 「21世紀の地方自治戦略シリーズ 第6巻 人形の町 飯田」ぎょうせい

参考資料

飯田市, 2011, 「人形劇のまちづくりを推進する新たな仕組みづくりに関する方針(中間報告)」

飯田文化会館人形劇のまちづくり係, 2010, 「人形劇を通じた小さな世界都市の実現に向けた指針 これからの人形劇のまちづくり～いつでも人形劇のある小さな世界都市をめざして～」

参考ウェブページ

飯田市議会会議録検索

<http://www.kaigiroku.net/kensaku/iida/iida.html>